

ダン・ディヴェニング Dan Devening
ポール・アーシェン Paul Erschen
ゲーリー・ステファン Gary Stephan
アリソン・ウェイド Allison Wade

“Warm Front”

2018年5月19日(土)~6月10日(日)
オープニングレセプション: 5月19日 6-8pm



Dan Devening "Winter Frame (1)" 2018

この度5月19日よりハギワラプロジェクトでは、ダン・ディヴェニング、ポール・アーシェン、ゲーリー・ステファン、アリソン・ウェイドの4名の作家によるグループ展「WarmFront」を開催いたします。作家でもあるダン・ディヴェニングにより運営されているシカゴのギャラリー、Devening Projectsのキュレーション展です。各作家ともに日本では初めての発表となります。

ゲーリー・ステファンによる、ペインティングの機能とその方法についての長年の探求は「Warm Front」展において美しく表明されている。繊細な知覚的ニュアンスにたいする彼の深い理解は、空間的イリュージョンと、ペイントされた物体に必然的に備わるリアリティ、この二つの間のバランスを変えうるものであり、彼はそれを、絵画的な機能と素材の本質のバランスを慎重にとりながら行使する。こうした精緻な連携を根底に備えた彼の作品は今もなお、新たな地平を切り開き続けている。

ステファンは、見るという行為の体験を仕込むために、それぞれのリサーチの構造を配置するが、それは微調整された色や形状の重ね合わせ、焦点のたわむれ、エッジ部分の活用による画面と裏面の接続などによってなされる。彼はこのように語っている。「サイズと位置を変えるたびに自動的に変わるパースペクティブを私は楽しんだ。そして私は、幾層もの絵の具のレイヤーの下に埋没した数々の形態のなかで、曖昧模糊とした絵画的フィクションをひとつの真実へと変えた。これら3点のペインティングを制作して楽しかったことのひとつは、サイズという点では小さいにもかかわらず、スケールの観点で見ればどれも大きいということだった」

アリソン・ウェイドが「Warm Front」展のために制作した作品は、その場で簡単に分解して再構成することさえ可能なほど軽やかな構造をそなえている。彼女はまず、壁の大きな布のコラージュ絵画を解体することから始めた。そこから得られた断片が今回の彫刻作品のベースとなっている。

新作の表面には色が塗られており、これは、このアーティストの新たな段階を示すものだ。過去、彼女はおもにセラミック、鉄、木といった硬質な素材をむき出しのままストレートに使用して、繊細なミクスト・メディアの彫刻作品を制作してきた。しかし今回の新作においては、表層の扱いがより複雑になっている。以前よりも手仕事の感覚が増し、そしてペインタリーなものになっている。

既存の物も、制作された物も、彼女のパレットには存在している。新作のベースに使われているデニム生地の手染めの緑と青は待ち望んだ春への目配せであり（彼女は真冬のシカゴでこの作品をつくっていた）、着色に使われているのは、ホームセンターの処分品セールの塗料とスタジオの同僚の使い残しである。

いくつかの新たな要素の出現にもかかわらず、この作品でわれわれは、彼女のもっとも深い部分に根ざした制作動機を即座に見ることができる。つまり、素材について知りたいという貪欲な欲望、優劣をつけることなく素材を扱いうる方法を求める探求心、二次元と三次元の境界線上を歩むことへの好奇心、色彩や形態とのたわむれがもたらす深い喜び。この作品は変化し続けている。その点において彼女の作品は「Warm Front」のコンセプト、つまり、ある状態から別の状態への変化/移行に関わっている。

ダン・ディヴェニングはシカゴ在住の画家、キュレーター、教師、ギャラリストである。「Warm Front」における彼の最新コラージュ作品では、特殊な壁紙が素材としてもちいられており、これによって個々の作品に強いコントラストとオプティカルな外観が与えられている。黄色いテープが生み出すパターンが壁の均一性を壊し、空間を不安定化している。緊張を生成し、ジェスチャーと平面とエッジの衝突によって生じる圧力を際立たせるディヴェニングのインスタレーションは、まるでステージのように機能し、コラージュの数々はそのステージ上で演じるドラマチックな役者たちとなる。フレームされた、あるいは再フレームされたタブローのなかで演じながら、命を吹き込まれたそれぞれのコラージュの個性が、鑑賞者を喜ばせようと自意識過剰気味なパフォーマンスをおこなう。

ディヴェニングは、素材そのものや素材の組立との、能動的で直感的な関係性を、紙の作品によって表明している。水性の顔料、既製あるいは構成された紙、縫われた糸。これらの小さなドローイング作品は異質のもの同士の衝突に後押しされ、形態と空間のアレンジメントとして機能する。壁とコラージュとの間で作用する力のように、これらの作品は静止と混乱の間の均衡状態へとたどり着く。そのエネルギーは小さなフレーム内に圧縮され、現代の私達の文化の機能についても描写しようとする。

ポール・アーシェンは「Warm Front」展において、キャンバスにマウントされたセリグラフ(シルクスクリーン)の新たなシリーズを展開している。この幾分強迫観念的な手法によって、鑑賞者はつぶさな作品観察へといざなわれ、そして、プリントよりもむしろペインティング作品の鑑賞体験に近い感覚をもたせられる。

彼は、完成したプリントをキャンバスのパネルにマウントする際に大胆なトリミングをおこなう。このプロセスが即興の要素を生み出し、さらに、作品にある種の疎外の感覚を付与する。いくつかの作品に見られるインクや顔料によるブラシストロークは、プリントのレイヤーがもつグラフィカルな荒々しさをぼかし、やわらげている。

それぞれのプリントはインクによるかっちりとしたグリッド状のドローイングから始まるが、やがて重ね刷りと色彩の重ね合わせの作業を通してより曖昧に、より暗示的なものになっていく。これらのグリッドは脱工業化時代の風景を想起させる。たとえば工場の見取り図、簡潔な遠近法の描写、看板や標識のグラフィック、建築のファサードなど。また、いくつかのプリントに見られる形態のネットワークは、ペイントされた木や成型されたオブジェをもちいた彼の彫刻作品にも見ることができる。これらの作品にもちいられている既存の物(ファウンド・オブジェクト)とヘラ状の形態から導かれる連想は、原始的な機械のからくりからSMプレイの器具、操り人形、医療用の拘束具にいたるまで、多様である。

Text by Dan Devening

translation Nao Osaka

HAGIWARA PROJECTS

160-0023 東京都新宿区西新宿 3-19-2-101

t/f +81 3 6300 5881 e: info@hagiwaraprojects.com

Open 火 - 土 11:00 - 19:00, 日 12:00-17:00 (月・祝日休廊)

www.hagiwaraprojects.com